

## 「地域力向上による減災ルネサンス・キックオフシンポジウム」を開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、9月28日(土)、環境総合館レクチャーホールにおいて、「地域力向上による減災ルネサンス・キックオフシンポジウム」を開催しました。同シンポジウムは、今年度より5年にわたり愛知県下5市町をモデル地区として行われる取り組みで、約60名の参加がありました。ここでは、データベースを根拠とした地域課題の整理



あいさつをする清水室長補佐

やワークショップを通じた人材発掘などからなる防災・減災対策方針の再構築(ルネサンス)を目的としています。

シンポジウムでは、まず福和減災連携研究センター長による開催のあいさつがあり、続けて清水乙彦文部科学省研究開発局地震・防災研究科防災科学技術推進室長補佐、宇佐見比呂志愛知県防災局防災危機管理課長からあいさつがありました。次いで、護 雅史同センター准教授によるプロジェクト概要、福田篤史名古屋都市センター調査課研究主査による名古屋都市センターの取り組みの紹介、山本真一郎愛知県防災局防災危機管理課主任による愛知県緊急雇用促進事業の紹介がありました。その後、飛田 潤災害対策室長のコーディネートのもと、半田市、津島市、犬山市、田原市、幸田町の防災担当者と小松 尚環境学研究科准教授による地域の概略説明や減災まちづくり方針の確認などが議論されました。会場からは、災害史としてのみならず「地域の歴史」として解釈する姿勢など、今後の防災・減災計画のありかたを地域戦略の枠組みで見つめ直す視点について、積極的な意見交換がありました。最後に、野田利弘副センター長の閉会のあいさつで終了しました。

## 公開シンポジウム「環境・文化芸術まちづくりへの処方箋」を開催

●グローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」

グローバル COE プログラム「地球学から基礎・臨床環境学への展開」は、9月22日(日)、愛知芸術文化センターアートスペース Aにおいて、公開シンポジウム「環境・文化芸術まちづくりへの処方箋～低炭素・アート・豊かな暮らし～」を開催しました。同シンポジウムでは、地域コミュニティ、縮小社会、環境シミュレーション等のデー



総合討論会の様子

タと共に、これからの環境と文化芸術のまちづくりについて、その理想及びそれを実践するための方法について、具体的な事例を取り上げ、その方向性を議論しました。

第1部基調講演では、林 良嗣交通・都市国際研究センター長が趣旨説明を含めて「都市化の診断と治療～経済の時代から環境・文化芸術の時代へ～」と題して講演し、あいちトリエンナーレ2013芸術監督である五十嵐太郎東北大学教授が「国際芸術祭とまちづくり」にてあいちトリエンナーレ2013の社会的位置づけを話しました。また、建築家の宇野 求東京理科大学教授は、「未来のまちの作り方」と題し、自身の作品事例からこれからのまちづくりの問題提起をしました。

第2部取組事例報告〈街並みから考える未来の暮らし〉では、あいちトリエンナーレ2013出品作家である建築家の藤村龍至東洋大学講師より市民参加のまちづくりに関して述べられ、村山顕人環境学研究科准教授、加藤博と同准教授、吉田友紀子同助教による低炭素社会構築手法に関する報告が行われました。

最後に、夏原由博同教授、黒田由彦同教授を含めた総合討論会が行われました。

## 第93回防災アカデミーを開催

●減災連携研究センター

減災連携研究センターは、9月20日(金)、環境総合館レクチャーホールにおいて、第93回防災アカデミーを開催しました。70名の参加がありました。

今回は、関谷直也東洋大学社会学部准教授より「風評被害－そのメカニズムと対策－」と題した講演が行われました。講演では、過去の風評被害の事例の紹介があった上で、



講演する関谷准教授

福島第一原子力発電所事故以降は、これまでの汚染が全くないにもかかわらず生じる経済的被害だけでなく、汚染はあるが、暫定基準値以下であるがゆえ生じる経済被害という2種類の風評被害があり、安全の許容量が人によって異なるからこそ深刻な問題となっている点を述べました。そして、具体的な風評被害対策として、「科学的な測定と産地を明確に分けて販売する」という例を挙げた上で、「県内と県外のロジックを別に考える」、「モニタリング検査の意味を理解する」、「情緒的説得ではなく、積極的な非購買者を抜いた8割の消費を上げる」など詳しく説明がありました。

会場からは講演内容を踏まえ、TV局の安全性やメディアへの要求などについて活発な質疑応答が行われました。

## 「名大のキノコ観察会」を開催

●博物館

博物館は、10月5日(土)、「名大のキノコの観察会」を開催しました。参加者は、幼児から幅広い年齢層で81名が集まりました。

まずは、事務棟裏の雑木林に入りました。キノコは、天候によって生え方が違うものですが、3週間以上まとまった雨のない状態が続いたため、キノコがあるかどうか心配



キノコを探索する参加者

でしたが、探してみるとタマゴタケ、シロオニタケ、キクバナイグチ、ヒイロタケ、ニガイグチ、ノウタケなど色とりどりのキノコが10数種類見つかりました。

1時間ほどの探索を終えた後は、博物館講義室で採集したキノコについて、講師の中條長炤 NPO 法人田中長嶺業績顕彰会理事長より説明がありました。参加者の関心が高いことは、どのキノコが食べられるかということであり、講師からは、「食べられるキノコは少ないので、確実に知っているキノコ以外は口にしないように」とアドバイスを受けていました。

また、希望者は同館講義室から、野外観察園セミナーハウス2階の展示室に移動して、現在博物館で開催されている「教育標本ムラージュ」のサテライト会場で展示中のキノコの写真展を見学しました。展示室には、今回の講師の中條理事長が愛知県内で撮影したキノコの写真が約40点展示してあります。参加者は、幻想的なものから、思わず手に取って食べたいくなるものまで、ここでも撮影秘話やキノコの説明を熱心に聞いていました。